

## なんくるないさの歩み

中尾聡子<sup>†</sup> (沖縄県家畜衛生試験場研究員・沖縄県獣医師会)

沖縄県に採用されて6年目になり、現在は沖縄県家畜衛生試験場で細菌検査を担当している。学生時代は授業の大半が小動物臨床であり、家畜と接する機会もなかったため、畜産の世界に入るとは夢にも思っていなかった。また授業中は馴染みのないウイルスや細菌の名前が覚えられず、細菌学は苦手な分野だったが、家畜保健衛生所で勤務していた頃に病原体を同定して診断することに興味を持ち、細菌の分野を志すようになった。一昨年には動物衛生研究所で細菌分野の長期研修を受ける機会に恵まれ、主にマイコプラズマの分離培養の技術を習得することができた。

沖縄県には本島北部と中央、宮古島、石垣島の4カ所に家畜保健衛生所があり、家畜衛生試験場は独立した機関として存在している。職員は僅か8名と少ないが、ウイルス、細菌、病理、生化学、原虫・寄生虫の分野で家畜保健衛生所から受けた病性鑑定の最終診断を行っている。日頃は検査室にこもって仕事をするのが多いため、今でも新採用で赴任した八重山家畜保健衛生所で勤務していた頃を懐かしく思い出す。もともと旅行と絵画が趣味だったので、離島へ外勤に出かける時には必ずスケッチブックを持参して、よく帰りのフェリーの待ち時間にスケッチをしていた。早朝からつなぎを着て、大きなごとクーラーボックスを持って船に乗り、離島に着いたら役場の車で農家を回り、昼になれば八重山そばを食べて帰るといった日々だった。また島でスケッチした絵をポストカードにして農家に渡すととても喜ばれ、次はこの景色を描いてほしいと案内されたりもした。描き溜めた絵は知り合いの協力を得て、1冊の本にまとめることができたが、その後子育てや職場の異動に伴い本の存在が薄れてしまい、現在も大量の在庫が家に眠っている。今後地道に販売していければと願う。

もともと動物が好きで、命を助けたいと思って入ったこの世界だが、思い返せば日々家畜の解剖ばかりしてきた。これが家畜保健衛生所の宿命と言えばそれまでだが、おかげで女性2人でも母牛の解剖ができるぐらいの自信はついた。このように理想と現実のギャップはあったが、病気の早期発見、早期診断が病気の予防と拡散を防ぐと信じて日頃から業務に努めている。

沖縄には山羊が多く、離島に行くときよく草むらに繋ぎ飼いされた山羊を見かける。私も以前雄山羊を飼っていたため、周りの人からはいつ食べるのかとよく聞かれていた。純粹にペットとして飼育していたのだが、職場の異動後に山羊汁にしたと聞かされた時はショックを受けた。やはりここ沖縄において、山羊は食材なのだ。山羊と言えば、私が現職場に赴任した矢先に起きた疾病も子山羊の伝染性無乳症というマイコプラズマによる疾病だった。主に子山羊に関節炎を引き起こす疾病だが、診断名は何故か伝染性無乳症となる理解し難い疾病である。診断法は動物衛生研究所で教わっていたため、分離同定はそれほど困難でなかったが、症例報告の少ない疾病であるため、獣医師会雑誌に投稿する運びとなった。その流れでこの原稿も執筆することとなったのだが、未だに何故経験の浅い私に依頼があったのか不思議に思う。

現職場に赴任して2年が経つが、本当に様々な疾病と遭遇することができた。ほんの1例だが、牛ではヨーネ病、ボツリヌス症、牛マイコプラズマ肺炎、豚では豚赤痢、豚レンサ球菌症、豚胸膜肺炎、グレーサー病、レプトスピラ症、豚マイコプラズマ病、鶏ではボツリヌス症、鶏壊死性腸炎、鶏マイコプラズマ病ときりが無い。このように多岐にわたっているため、研修では教わらなかったことも多く、日々勉強の繰り返しだった。この中でも最も印象に残っている疾病がレプトスピラによる豚の異常産だ。もともとレプトスピラにはそれほど興味が

## 中尾 聡子

## — 略 歴 —

- 2006年 鳥取大学卒業
- 同 年 沖縄県八重山家畜保健衛生所臨時的任用
- 2008年 沖縄県八重山家畜保健衛生所勤務
- 2011年 沖縄県中央家畜保健衛生所勤務
- 2012年 沖縄県家畜衛生試験場勤務
- 現在に至る



<sup>†</sup> 連絡責任者：中尾聡子 (沖縄県家畜衛生試験場)

なく、顕微鏡凝集試験も周りからの強い要望で始めた仕事だった。検査には生きて菌体が必要なため、15種類の血清型のレプトスピラ菌を常時培養し、2週間ごとに継代していくのだが、長期間培養するため、初めは随分雑菌に悩まされた。今ではコツも掴み、雑菌によるコンタミは少なくなったが、それでも時々フィルターを通して注意をしている。嫌々始めた仕事だったが、これだけの血清型を取り揃え、家畜のレプトスピラ症を顕微鏡凝集試験で診断できる機関はほとんどないため、後押ししてくれた方々には大変感謝している。

農家は母豚が流産すると大抵レプトスピラ症だと言うが、実際に検査をすると遺伝子検査では陰性になることばかりで、抗体検査では陽性だったり陰性だったり、正直レプトスピラ症の診断基準に悩んでいた時期だった。それは私自身に限らず、全国的にも遺伝子検査より顕微

鏡凝集試験による抗体検査が主流になっている気がする。そんな中、表皮に点状出血の見られる流産胎子から遺伝子検査で陽性となる事例と遭遇することができた。当時は顕微鏡凝集試験にもだいぶ慣れてきており、母豚の抗体検査では血清型 *Hebdomadis* に対して高い抗体価を示し、病理組織学的検査でも病変が見られたため、県内では18年ぶりに豚のレプトスピラ症による異常産と診断することができた。ただ残念なことに、臓器が新鮮でなかったため分離培養を実施することができなかったことは今でも悔やまれる。レプトスピラは抗体検査から農場にいることがわかっているが、なかなかその実態を掴みきれない不思議な菌体だ。そのレプトスピラに思いを馳せながら、いつかは分離してみたいと夢を描いて、これからも病性鑑定に携わっていきたい。